

情報化・消費社会のなかの高校生(下)

中西公子*・加野芳正**

- I. はじめに
- II. 先行研究の検討
- III. 調査の手順と方法
- IV. 調査結果
 - 1. 家庭と放課後の過ごし方
 - 2. 学校生活について
 - 3. 部活動とアルバイト
 - 4. 高校生と携帯電話
 - 5. 自分自身について(性格・規範意識・マナー・友人関係)
- V. おわりに

(前稿「情報化・消費社会のなかの高校生(上)」においては、I. はじめに、II. 先行研究の検討、III. 調査の手順と方法、IV. 調査結果 1. 家庭と放課後の過ごし方、2. 学校生活について、を記述した。本稿「情報化・消費社会のなかの高校生(下)」においては、IV. 調査結果 3. 部活動とアルバイト、4. 高校生と携帯電話、5. 自分自身について(性格・規範意識・マナー・友人関係)、V. おわりに について記述する。なお、図表、注の番号については、(上)(下)で通しとし、「注」は(下)の末尾にまとめた。)

3. 部活動とアルバイト

すでにみてきたように、塾や予備校との関わりは、学校類型によってまったく異なる様相を呈していた。このことは、放課後や休日の過ごし方の差となって現れる。また、部活動への取り組みにも影響を及ぼさずにはおかない。そして、部活動への関わりはアルバイトとも関連してくる。というのも、部活動もせず、塾へも行かない生徒は、空いた時間でアルバイトを始めることが少なくなからである。その意味で、部活動とアルバイトは別々のものではない。そこで、部活動とアルバイトを相互に関連させながら、検討していきたい。

3-1 学校生活と部活動

部活動と学校生活の関係についての先行研究は数多くある。その結果は端的に言うと「部活動に積極的に取り組んでいる生徒は、学校生活に対しても前向き」というものである。今回の調査でもこのような経験則はあてはまるのだろうか。表30は学校生活全般に対する評価と、部活動所属との

* 中西公子(高松商業高校教諭、香川大学大学院教育学研究科 平成21年3月修了)

** 加野芳正(香川大学教育学部)

関連をみたものである。これをみると、「学校生活は楽しい」「クラスに親しみを感じる」「クラスに気の合う人が多い」などの項目では、部活動（とくに運動部）に所属している生徒の方が、「そう思う」（「とてもそう思う」+「ややそう思う」）と回答している割合が高い。反対に「学校をやめたいと思うことがある」「校則は厳しい」などの項目では、「そう思う」という回答が少なくなっている。こうしたデータから、部活動に所属している生徒は、学校生活により積極的であるといえよう。

表30 学校生活全般に対する評価（「そう思う」の割合）

	全体	所属	非所属	運動部	文化部
1. 学校生活は楽しい	80.6%	84.5%	70.0%	85.6%	75.5%
2. クラスに親しみを感じる	77.8%	79.8%	72.8%	82.3%	73.3%
3. 学校の休み時間は楽しい	84.6%	86.7%	78.9%	87.2%	82.0%
4. 気軽に話し合える先生が多い	51.5%	53.3%	46.4%	52.8%	50.1%
5. 就職や進学について友人と話すことが多い	49.6%	49.7%	48.8%	46.8%	52.2%
6. クラスに気の合う人が多い	73.4%	75.5%	68.1%	78.6%	68.3%
7. 校則は厳しい	60.4%	57.8%	67.3%	59.5%	60.8%
8. 先生の言うことに納得がいかないことがある	67.0%	64.9%	72.6%	65.3%	68.6%
9. 学校をやめたいと思うことがある	33.9%	29.4%	45.5%	29.0%	38.5%
10. 進路に役立つ授業が多い	51.3%	52.2%	48.4%	51.0%	51.0%
11. 自分の興味、関心にあった授業が多い	38.2%	39.4%	34.8%	37.1%	39.3%

このことは、勉強時間についてもいえそうである。一般的にあって、部・同好会に所属している生徒は拘束時間が長いので、入部していない生徒に比べ勉強時間は少ないと考えられる。しかし、図2でみる限り⁴⁾、平均勉強時間は非所属の者とあまり変わらないようである。確かに「3時間以上」では、部活動に所属していない生徒の割合が高くなっている。反面で「0時間」をみると、部活動に所属していない生徒の割合の方が多くなっている。このように、部活動と生徒たちの前向きな学校生活には確かに相関がある。その点で、本研究の結果は先行研究を支持しているといえよう。

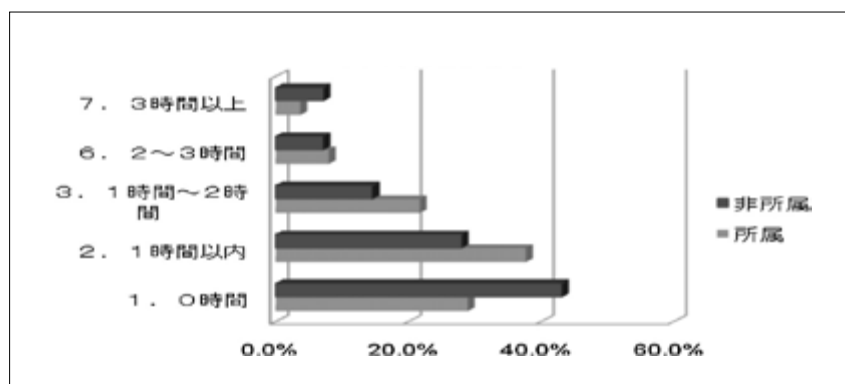


図2 部・同好会所属と平日の勉強時間

3-2 アルバイト体験

消費社会の一員としての高校生をみたとき、アルバイトの問題は見逃せない。現代の高校生の特徴を考えると、アルバイトは一つのキーであると考えている。表31は、アルバイト経験率を表したものである。

表31 アルバイト経験率

	全体	男	女	普通科Ⅰ	普通科Ⅱ	専門学科
アルバイト経験	25.6%	22.1%	28.3%	9.7%	22.8%	37.2%

「アルバイトをしたことがありますか」という問いに、全体の25.6%が「経験ある」と答えている。女子は男子に比べるとアルバイト経験率が6.2%高くなっている。「専門学科」の生徒はアルバイト経験率が37.2%と「普通科Ⅰ」(9.7%)、「普通科Ⅱ」(22.8%)よりもかなり高くなっている。香川県の公立高校では、アルバイトは「原則禁止」であるので、現在やっても「夏休みなど、長期の休みの時だけにする」「以前したことがあるが現在はしていない」と答えていることが十分予測される。現に、生徒からの回答票を精査してみると、「小遣いなし」、「部・同好会に所属せず」、「携帯電話の使用料金が大きく」「支払いは自分」という不可解な回答を寄せる生徒を何人も発見している。このことから25.6%という数字以外に、暗数の部分があって、実はもっと多くの生徒がアルバイトを経験している可能性がある。

では、高校生はどのようなところで、どのような内容のアルバイトをしているのだろうか。それをまとめたのが表32と表33である。この2つの表は、生徒たちが具体的に書いたものを、表32のアルバイト先については10のカテゴリーに、表33の仕事内容については4つのカテゴリーに、執筆者の側が分類したものである。

アルバイト先としては「飲食店・居酒屋」(33.1%)がもっとも多く、「スーパー・食品販売」

表32 アルバイト先

コンビニ・ファーストフード	9.5%
スーパー・食品販売	10.1%
飲食店・居酒屋	33.1%
郵便局	8.5%
遊園地	1.0%
運送会社・ガソリンスタンド・電機屋	5.2%
本屋・美容院・病院	1.9%
農業	0.2%
ホテル・結婚式場・宴会場	1.7%
塾・家庭教師	1.2%
記入なし・秘密	27.7%

表33 仕事内容

接客	60.8%
裏方	26.5%
製造	10.8%
指導・マル付け	1.9%

(10.1%)、「コンビニ・ファーストフード」(9.5%)と続いている。この三つで、過半数を占めている。「郵便局」(8.5%)は、年末年始の年賀状の整理・配達などが主な内容であろうか。これは学校側も禁止していないようだ。この表には出ていないが、「運送会社」のほかにも「倉庫での荷物卸おろし」「派遣」と、アルバイト先は多方面に渡っている。

表33に示すとおり、アルバイト内容としては販売、レジなどを含んだ「接客」(60.8%)の割合がもっとも多い。次いで、仕分け、清掃、品だしなどの「裏方」(26.5%)、「製造」(10.8%)と続いている。また、27.7%はアルバイト先について記入していなかった。アルバイトについては原則として禁止している高校が多く、無断でアルバイトに従事している生徒にとっては、記入することを躊躇させる内容である。

質問紙の自由記述の欄に、「いまどきの高校生はアルバイトをするのは当たり前」と書いた生徒もいた。私たちは、学校こそが彼らの主要な活動場所と考えているが、一部の高校生にとっては、アルバイトこそが主要な活動の場、あるいは、学校と同じくらい大切な場となっている。大学生のように、アルバイトが生活の中に定着しつつあるのだろうか。

表34 アルバイトの理由

	全体	男	女
1. こづかい(携帯電話代も含む)をかせぐため	53.9%	52.7%	54.6%
2. やってみたい仕事だったから	5.5%	6.3%	5.0%
3. 実社会に触れたかったから	12.2%	15.4%	10.5%
4. 友だちに誘われたから	5.0%	5.4%	4.8%
5. 家計を助けるため	13.4%	11.7%	14.4%
6. その他(具体的に)	10.1%	8.6%	10.7%

では、高校生は何のためにアルバイトをするのだろうか。その理由を尋ねたところ、「こづかい(携帯電話代も含む)をかせぐため」が53.9%でもっとも多く、続いて「家計を助けるため」(13.4%)、「実社会に触れたかったから」(12.2%)をあげている。消費社会の進展とともに、高校生も欲しいものが数多くあり、それらを手に入れるためにアルバイトをしている。また、携帯電話の使用料も必要で、アルバイト従事と密接な関係があるに違いない。

表35 初めてアルバイトをした時期

	全体	男	女	普通科 I	普通科 II	専門学科
1. 高校入学以前	14.6%	20.9%	10.9%	34.3%	13.6%	12.3%
2. 高校1年生	64.1%	59.0%	67.2%	57.1%	60.2%	67.1%
3. 高校2年生	18.2%	17.3%	18.8%	8.6%	23.7%	16.9%
4. 高校3年生	3.0%	2.9%	3.1%	0.0%	2.5%	3.7%

表35はアルバイトを開始した時期を示している。全体の64.1%が「高校1年生」と答えている。また、「高校入学以前」に「初めてアルバイトをした」と答えた生徒も14.6%いる。特に、「普通科 I」で、「初めてアルバイトをしたのは高校入学以前」と答えた生徒の割合が多い。前述の表31からわかるように、「普通科 I」でアルバイト経験のある者は約1割である。すなわち「普通科 I」489名の1割なので49名、そのうちの約34%の生徒17名が「高校入学以前」に初めてアルバイトを経験したと答えている。割合だけからいうと大きいように思えるが、実数でみればわずかである。

では、週に何日くらいアルバイトをして、収入はどれくらいになっているのだろうか。このことを調べた結果が表36と表37である。まず、アルバイトの頻度をみると、週に「3～4日」というのがもっとも多く、全体の40.8%を占めている。かなりの日数、かなりの頻度であるといえよう。また、週に「5～6日」という高校生も25.3%に達している。ほぼ毎日である。

表36 アルバイトの頻度

	全体	男	女	普通科 I	普通科 II	専門学科
1. 1日	6.1%	6.1%	6.2%	15.6%	3.4%	6.2%
2. 2日	23.7%	22.9%	24.3%	25.0%	27.6%	21.6%
3. 3～4日	40.8%	35.9%	43.2%	37.5%	41.4%	41.0%
4. 5～6日	25.3%	30.5%	22.6%	15.6%	24.1%	27.3%
5. 月に1～2日	4.0%	4.6%	3.7%	6.3%	3.4%	4.0%

表37 アルバイトの収入額

	全体	男	女	普通科 I	普通科 II	専門学科
1. 1万円未満	8.6%	8.4%	8.7%	31.3%	8.7%	5.3%
2. 1万～3万円	36.1%	29.8%	39.7%	34.4%	36.5%	36.1%
3. 3万～5万円	28.3%	26.7%	28.9%	21.9%	32.2%	27.3%
4. 5万～8万円	19.5%	22.9%	17.8%	12.5%	18.3%	21.1%
5. 8万円以上	7.5%	12.2%	5.0%	0.0%	4.3%	10.1%

収入については表37に示すように、「1万～3万円」がもっとも多く36.1%、「3万～5万円」が28.3%となっている。「8万円以上」と答えた者も7.5%いる。男女別に頻度と収入額をみると、男子の方が女子よりも、週当たりのアルバイト回数が多く、また、収入も多いという傾向がみられる。

3-3 アルバイトと部活動

アルバイトは学校生活にも大きな影響を及ぼすことから、学校分類別、学年別、部活動への入部率とクロスさせながら検討してみよう。それが図3である。これをみると、すべての学校類型(普通科Ⅰ、普通科Ⅱ、専門学科)で、学年が上がるにつれアルバイト経験率が高くなっている。ここでは、現在アルバイトをしているか否かではなく、経験の蓄積を尋ねているので、経験率が高くなるのは当然でもある。それに対して、部活動入部率は学年の上昇とともに低下している。部・同好会をやめてアルバイトに向かっていることも一つの要因であろう。「専門学科」1年生の入部率は81.4%、アルバイト経験率は14.3%であるが、3年生になると入部率とアルバイト経験率は逆転する。このように、部・同好会入部率とアルバイト経験率とは裏腹の関係にある。「普通科Ⅱ」「専門学科」では、アルバイト経験率の増加が入部率の減少より大きくなっている。とくに「専門学科」では、3年生になると入部率が半数近くに減少する一方(調査は6月～7月)、アルバイト経験率は56.5%にまで上がっている。

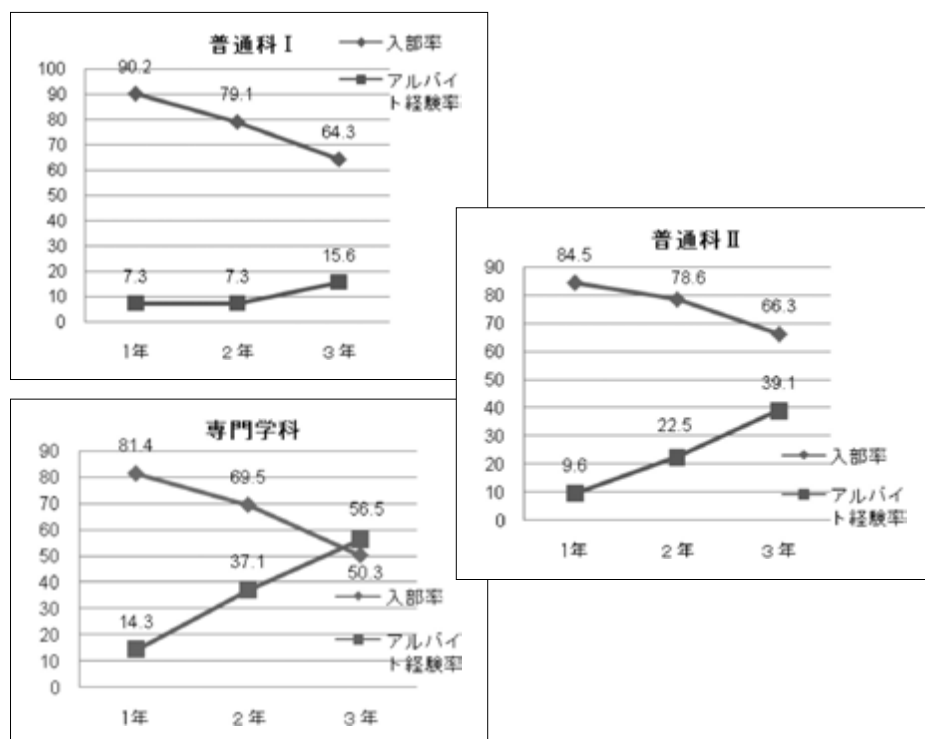


図3 学校分類別にみたアルバイトと部活動

3-4 アルバイト経験者と非経験者の比較

これだけアルバイト率が上昇すれば、学業に悪影響を及ぼすのではないかと危惧される。そこで、アルバイトが高校生の生活にどのような影響を及ぼしているのか、若干の検討を加えておきたい。アルバイト経験者と非経験者での違いを表したのが、表38である。

表38 アルバイト経験者と非経験者の違い

	経験者	非経験者	
小遣い無し	32.4%	18.1%	
勉強時間0時間	49.3%	26.5%	
携帯電話所有率	97.3%	96.6%	
使用時間（3時間以上）	44.8%	26.7%	
（平均時間）	(135.5分)	(110.0分)	(全平均116.4分)
使用料金（1,5000円以上）	6.7%	5.0%	
（平均使用料金）	(8867.2円)	(8121.7円)	(全平均8305円)
使用料金・自己負担率	15.5%	2.6%	
携帯電話を学校に持ってきている	91.1%	89.0%	
携帯電話を家に忘れると取りに帰りたくなる	54.3%	39.9%	
メールが届いていないかよくチェックする	58.8%	53.0%	
メールにはすぐ返事をかえすようにしている	64.2%	69.3%	
一日50回以上メールを送信している	17.5%	11.3%	

まず「小遣い無し」をみると、アルバイト経験者の32.4%は小遣いをもらっていない。これに対して「非経験者」では18.1%である。携帯電話の使用料金を自分で払っている割合も、「非経験者」が2.6%であるのに対して、アルバイト経験者は15.5%と高い。さらに、携帯電話の使用時間も長く、使用料金も高いといえる。アルバイト経験者は一日平均「3時間以上」携帯電話を使用している割合が44.8%であるのに対して、「非経験者」は26.7%である。「携帯電話を家に忘れると取りに帰りたくなる」割合をみると、アルバイト経験者が54.3%であるのに対して「非経験者」では39.9%である。直接的な因果関係はみえにくいだが、アルバイト経験者は携帯電話に対する依存度がより高い傾向にあるといえよう。

当然ではあるが勉強時間が「0時間」と答える生徒の割合も、アルバイト経験者に多い。アルバイトをすれば自由な時間が少なくなるが、残りの時間を勉強にあてず、携帯電話の使用時間に当てている。携帯電話の使用を短くすれば、アルバイトをしなくてもよいのではと考えることもできるが、高校生にとってアルバイトと携帯電話は、どちらも生活のなかで切り離せないものようになってきている。携帯電話の使用時間が長いから、その使用料金を稼ぐためにアルバイトをするということにもなるが、アルバイトをすることにより自分で稼いだ感覚になり、使用時間が長くなってしまふという側面もあるだろう。彼らは自由な時間があるのでアルバイトをする、と考えているのである。実際アルバイトを始める動機として、「暇だから」と記述していた生徒がいた。こうした高校生にとっては、「高校生の本分は勉強」という価値観がとっくの昔に消失してしまっているであろう。

親の保護のもと、食べることも親にしてもらっている生徒にとって、「毎月3万円以上の小遣い」は多すぎるようにも思われる。他方、昼食代、教材費、学費などすべてを自分で賄っている生徒もいる。家計が苦しく、アルバイトをしなければ高校生活を続けることのできない「苦学生」も昨今の格差社会の中で増大している。一口にアルバイトといっても、就業の理由は様々である。このようにアルバイトに向かうことをどのように評価すればよいのであろうか。これには二つの考え方がある。一つは、アルバイトは社会体験として価値があるという考え方である。アルバイトをすることで社会を知り、社会の厳しさも体験するはずである。もう一つは、アルバイトに向かうために「パート・タイム生徒」⁵⁾になってしまい、学校が彼らの生活に占める比率が小さくなることに対する懸念を表す考え方である。また、安易なアルバイト経験はフリーターに結びつくという考え方もある（吉田美穂「高校生のアルバイト経験とキャリア教育」『第15回日本子ども社会学会発表要旨収録』2008年、51-52頁）。

アルバイトを経験することでより消費社会にどっぷりと組み込まれている今の若者を、アルバ

イトから遠ざけることは難しい。自分で稼いだお金で財布を買い、バッグを買い、化粧品を買い、ケータイを替え、携帯の使用料金を自分で払い、こうして大人の楽しみを知る「プチ大人」が誕生する。高校生と大学生、高校生と大人との境界がますます曖昧になりつつある。

4. 高校生と携帯電話

高校生にとって携帯電話は今や必需品といってもよく、ほとんどの高校生にとって携帯電話はなくてはならないものである。この携帯電話は「ケータイ」とも呼ばれ、学校への持ちこみ、ネットいじめ、プロフやブログと犯罪との関連など、さまざまな問題点が指摘されている。ここでは、高校生が携帯電話をどのように使用し、そのことが高校生の生活にどのような影響を与えているのか、そのことを考えてみたい。

4-1 所持率と持ち始めの時期

まずは、携帯電話の所持率についてである。すでに香川県においても、2007年度に児童生徒健全育成等連絡協議会によって実態調査が実施されている。そこでは全体で96.7%、男子95.3%、女子98.2%という結果であった。今回の私たちの調査でもほぼ同様であり、全体で96.8%、男子95.3%、女子98.0%が自分専用の携帯電話を所持していた。男女別にみると、女子の所持率が2.7%高かった。

表39 自分専用の携帯電話を持っているか

	全体	男	女	普通科 I	普通科 II	専門学科
1. 持っている	96.8%	95.3%	98.0%	97.5%	98.7%	95.0%

表40 持ち始めの時期

	全体	男	女	普通科 I	普通科 II	専門学科
1. 小学校の頃から	9.6%	5.5%	12.8%	10.9%	9.4%	8.9%
2. 中学校の頃から	40.6%	36.9%	43.6%	37.9%	41.7%	41.4%
3. 高校へ入学してから	49.8%	57.5%	43.7%	51.2%	48.8%	49.7%

では、携帯電話をいつ頃から所持するにいたったのだろうか。それをみたのが表40である。これからわかるように、全体の50.2%は、高校入学時にはすでに携帯電話を持っており、全体の1割の生徒にいたっては、小学生の頃から持っていたことがわかる。とくに女子は、男子に比べ早いうちから所持する傾向がある。持ち始める時期と学校分類との間には、相関はみられなかった。

4-2 小学校から携帯電話を持っている生徒について

小学校の時期から携帯電話を持っているということは、携帯電話の使用年限が少なくとも4年以上になる。このことが高校生活にどのような影響を及ぼしているのだろうか。ここでは「小学校から持っている生徒」の特徴を描くという形で、現代高校生と携帯電話との関わりについて考察していきたい。その一端を示したのが表41である。少し全体のデータに触れておくと、「携帯電話を学校に持ってきている」89.5%、「携帯電話を家に忘れると取りに帰りたくなる」43.6%、「メールが届いていないかよくチェックする」54.5%、「メールにはすぐ返事を返すようにしている」68.4%など、今や高校生の生活にとって携帯電話は欠かせないものであり、生活のなかに深く根を下ろしていることがわかる。結論的にいえば、小学校から携帯電話を所持している生徒は、こうした状況がさらに進行した生徒であるということが出来る。

表41 小学校から持っている生徒の特徴

	全体	小学校 ¹²⁾
勉強時間 0時間 (平均勉強時間)	32.7% (53.5分)	39.9% (47.0分)
使用時間 (3時間以上) (平均時間)	31.2% (116.4分)	47.2% (138.7分)
使用料金 (15,000円以上) (平均使用料金)	5.3% (8305.3円)	12.1% (9640.8円)
使用料金・自己負担率	5.8%	6.3%
携帯電話を学校に持ってきている	89.5%	93.7%
携帯電話を家に忘れると取りに帰りたくなる	43.6%	56.7%
メールが届いていないかよくチェックする	54.5%	60.5%
メールにはすぐ返事をかえすようにしている	68.4%	66.9%
一日50回以上メールを送信している	13.0%	20.8%

表41をみると、小学生の時から携帯電話を所持している生徒は、「勉強時間」、「使用時間」、「使用料金」⁶⁾で全体の平均とは違う様相を呈しているように思われる。「平日の授業以外の勉強時間」が「0時間」と回答した生徒をみると、全体が32.7%であるのに対して、小学校から携帯電話を所持している層では39.9%である。1日平均「3時間以上」使用している生徒をみると、全体が31.2%であるのに対して、小学校から所持している層をみると47.2%にはね上がる。使用料金についても、小学校から所持している層の方が高額を支払っている。「携帯電話を家に忘れると取りに帰りたくなる」をみると、全体では43.6%であるが、「小学校から持っている層」では56.7%となる。また、「1日50回以上メールを送信している」をみると、全体では13.0%であるものが、小学校から所持している層をみると20.8%になっている。全体して、携帯電話を早くから所持するほど「携帯づけ」「携帯依存」の状況が進んでいるといえよう。

このことをもう少し詳しくみるために、分散分析を試みた。「勉強時間」、「使用時間」、「使用料金」を従属変数、「持ち始めの時期を」独立変数として分析した結果が表42である。これをみると、「勉強時間」については必ずしも有意な差をみつけることはできなかったものの、「使用時間」と「使用料金」には有意な差が認められた。携帯電話を早くもち始めた生徒の方が、携帯電話の使用時間が長く、また、使用料金も高いという点が再確認されたといえよう。なお、勉強時間について、平日の授業以外の勉強時間「0時間」と「それ以外」、「小学校から携帯電話を持っている」と「それ以外」でクロス分析を行い、カイ二乗検定を行ったところ、 $\chi(1) = 4.247, p < .05$ となり、小学校から携帯電話を持ち始めた生徒は、平日の授業以外の勉強時間が「0時間」の割合が高くなるという傾向が認められた。

表42 持ち始め時期別、勉強時間・使用時間・使用料金(分散分析)

	小学校	中学校	高校	F値
勉強時間 平均 (標準偏差)	47.76 61.182	53.28 67.577	55.89 61.056	1.273
使用時間 平均 (標準偏差)	138.28 66.083	124.06 64.074	105.69 62.283	28.535***
使用料金 平均 (標準偏差)	9640.80 4109.274	8545.33 3095.965	7829.61 2783.735	29.614***

5. 自分自身について(性格・規範意識・マナー・友人関係)

今回の調査では高校生自身(性格や規範意識、マナー、友人関係など)についても尋ねている。これらの項目を明らかにすることは、現代の高校生像を探るうえで重要だと考えたからである。

5-1 パーソナリティ特性

現代の高校生は、自分のパーソナリティ特性や友人関係について、どのようにみているのだろうか。表43は、「人を笑わせるのが得意である」「何でも話せる友人がいる」など11の項目を取り上げ、「あてはまる」(「とてもよくあてはまる」+「ややあてはまる」)の割合を示したものである。

「人を笑わせるのが得意である」をみると、全体の51.7%、女子だけだと58.4%の生徒が「あてはまる」と回答している。「何でも話せる友人がいる」については、83.6%が「あてはまる」と答えている。しかし、「友人から信頼されている」には、60.2%が「あてはまる」と答えるにとどまっている。自分では、何でも話せる友人がいると思っていながらも、信頼されているかどうかについては自信がないというわけである。「人からどう思われているか気になる」については80.1%が、「友人の意見に合わせようとする」に62.0%が、それぞれ「あてはまる」と答えている。一方、「あてはまる」という回答が少ない項目としては、「自分に自信がある」(16.5%)、「自分が好きだ」(24.5%)、「先頭に立ってものごとをするのが好きだ」(28.1%)などがある。

表43 自分の人柄について(「あてはまる」の割合)

	全体	男	女	普通科Ⅰ	普通科Ⅱ	専門学科
1. 人を笑わせるのが得意である	51.7%	43.5%	58.4%	51.7%	52.9%	50.8%
2. 何でも話せる友人がいる	83.6%	79.3%	87.1%	84.5%	83.5%	83.1%
3. 友人から信頼されている	60.2%	56.8%	62.8%	64.3%	60.2%	57.6%
4. 友人とは電話・携帯のほうが話しやすい	22.8%	23.9%	22.0%	17.8%	20.6%	27.6%
5. 人と遊ぶより一人で遊ぶほうが好きである	27.4%	26.5%	28.1%	26.4%	28.9%	26.8%
6. 人からどう思われているか気になる	80.1%	75.8%	83.7%	84.0%	81.4%	76.8%
7. 誰とでも気軽に付き合える	55.7%	57.8%	53.9%	60.6%	54.3%	53.8%
8. 友人の意見に合わせようとする	62.0%	66.0%	58.7%	64.7%	62.3%	60.1%
9. 先頭に立ってものごとをするのが好きだ	28.1%	28.4%	27.7%	31.3%	28.1%	26.2%
10. 自分に自信がある	16.5%	23.4%	11.0%	19.1%	15.2%	16.0%
11. 自分が好きだ	24.5%	30.3%	19.8%	27.5%	21.7%	24.9%

これらの結果から描かれる生徒像としては、自分にあまり自信が持てず、友人関係の中で他人からどう思われているのかが気になり、友人に意見を合わせ、友人のあとからついていくようなものである。当然、リーダーシップをとって先頭に立ち、行動するのが好きではなく、誰とでも気軽に付き合えるといった社交性も弱い。ただ、他の調査の結果から敷衍すると、自分に自信があまりないと答えるのが日本人の性格特性のようである(石川准『アイデンティティゲーム—存在証明の社会学』新評論、1998年、6-7頁)。このあたりを留意してデータを解釈する必要があるだろう。

データを男女別にみると、「何でも話せる友人がいる」に女子の87.1%が「あてはまる」と答えているのに対し、男子は79.3%、「人からどう思われているか気になる」に女子の83.7%が「あてはまる」と答えているのに対し、男子は75.8%である。これらの結果から、女子の方が、人目を気にしながらも友人関係の輪を広げている様子が思い浮かぶ。「誰とでも気軽に付き合える」については、女子の53.9%、男子の57.8%が「あてはまる」と答えている。男子の方が「友人の意見に合わせようとする」割合が高く、男子66.0%に対し、女子は58.7%であった。友だち付き合いの質の違いが表れているようにも思える。また、「自分に自信がある」「自分が好きだ」には、男子の方が「あてはまる」と答えている割合が高い。

「自分に自信がある」については、学校分類間で差があると予想したが、「普通科Ⅰ」19.1%、「普通科Ⅱ」15.2%、「専門学科」16.0%となっており、割合からみるとそれほど差は見られなかった。また、「自分が好きだ」についても同様で、「普通科Ⅰ」27.5%、「普通科Ⅱ」21.7%、「専門学科」24.9%となっており、ここでも顕著な差はみられなかった。ただ、「友人とは電話・携帯のほうが話しやすい」については、「専門学科」において「あてはまる」という回答が多かった。

5-2 規範意識

高校生の規範意識について尋ねた結果が表44である。ここでは「友だちと酒を飲む」「タバコをすう」など、13項目を取り上げ、「高校生としての自分がやってはいけない」と思うものにマルをつけてもらった結果である。高校生はまだ大人ではない、しかし、もう子どもでもないというマージナルな立場にあり、また、規制の秩序から距離を取りたいと考える年頃でもあるので、規範意識についての高校生の反応は微妙である。

「高校生としての自分がやってはいけない」ものとして、80%以上の生徒がマルをつけた項目は4つある。一番目が「シンナー」で96.8%、続いて「万引き」93.7%、「いじめ」88.4%、「タバコ」83.6%となっている。これらの項目を男女別にみると、「やってはいけない」という回答は女子に多い。学校分類別にみると「タバコをすう」に関して「普通科Ⅰ」が90.6%であるのに対して、「普通科Ⅱ」83.6%、「専門学科」79.2%となっており、専門学科でやや「ゆるむ」傾向があった。

表44 高校生として「やってはいけない」と思うもの(○がついた割合)

	全体	男	女	普通科Ⅰ	普通科Ⅱ	専門学科
平均の選択個数 ⁷⁾	8.2	8.4	8.1	9.0	8.1	7.8
1. 友だちと酒を飲む	64.9%	64.4%	65.4%	73.1%	61.8%	62.2%
2. タバコをすう	83.6%	82.3%	84.7%	90.6%	83.6%	79.2%
3. シンナーをすう	96.8%	94.6%	98.7%	97.7%	97.7%	95.6%
4. 万引きをする	93.7%	90.2%	96.5%	97.1%	93.3%	92.0%
5. いじめ	88.4%	83.6%	92.3%	90.8%	87.5%	87.6%
6. 学校の物をこわす	75.9%	73.8%	77.6%	80.9%	73.8%	74.4%
7. 学校の規則に合わない服装をする	48.6%	54.9%	43.7%	54.6%	44.9%	47.8%
8. オートバイ、バイクに乗る	59.6%	59.0%	60.2%	64.7%	58.9%	57.0%
9. 口紅やマニキュアをつける(化粧をする)	38.1%	53.3%	26.1%	38.6%	34.3%	40.8%
10. 髪の毛を染める	41.6%	53.4%	32.2%	44.8%	39.0%	41.6%
11. ピアスをする	49.1%	62.2%	38.7%	56.9%	43.9%	48.2%
12. 学校をさぼってブラブラする	57.4%	59.3%	56.0%	62.8%	54.6%	56.2%
13. 無断で外泊をする	47.0%	43.0%	50.2%	53.2%	44.6%	45.1%

「学校の規則に合わない服装をする」「口紅やマニキュアをつける」「髪の毛を染める」「ピアスをする」などの「オシャレ」の領域についてみると、「高校生としての自分がやってはいけない」とした割合は、おおむね4割前後である。逆に言えば、過半数の生徒は「かまわない」と考えていることがわかる。これらの項目は、男女によって大きな違いがあり、女子は、これらの項目についての許容度が高い。化粧、髪、ピアス、服装などについては、ジェンダーを反映して、男子より女子の方が興味のある事柄であり、この結果は当然のように思われる。とはいえ、女子の三分の二がこれらの項目に対して許容している点については、生徒指導の側面からも改めて考えてみる必要があるだろう。

「無断で外泊をする」については、43.0%の男子生徒が「やってはいけない」と回答しており、女子でのこの割合は50.2%であった。無断外泊を実際に行っているかどうかのデータはない。しかし、高校生がこうした行為を許容する傾向にあることは事実である。親世代の高校生時代とは、生徒の規範意識が大きく変わり、それだけに家庭でのしつけや学校での生徒指導に、確たる信念を持って取り組むことが困難になっているといえよう。

なお、表44にはいくつのマルをつけたか、その平均個数を「全体」「男女別」「学校分類別」に記載している。全体の平均は8.2個であった。したがって、一般にこれよりマルの数が多ければ規範意識が強い、少なければ規範意識が弱いということになる。もっとも、先ほどの「オシャレ」に関する項目などは法律に違反する行為でもなければ、男女によっても大きく異なり、また、違反しているかどうかの境界も曖昧な項目である。したがって、単にマルの数が多いかどうかで判断するこ

とには慎重でなければならない。そうした留保をつけながらみていくと、女子より男子の方が、マルの数が多。これは「オシャレ」関係の項目において、女子よりマルの数が多からである。学校類型ごとにみると、「普通科Ⅰ」が9.0でもっとも多く、「普通科Ⅱ」が8.1、「専門学科」7.8となっている。「普通科Ⅰ」と「専門学科」を比較すると、「友だちと酒を飲む」「タバコをすう」「ピアスをする」「無断で外泊する」などの項目で、「専門学科」の生徒の方が許容的であり、このような結果になっているものと解釈できる。

以上のことを再確認する意味で、カテゴリー間で有意な差があるか否かを、t検定もしくは分散分析をおこなった。「規範意識(○の個数)」を従属変数、「性」、「学校分類」、「学年」、「アルバイト経験」を独立変数として行ってみた。図表としては示していないが、その結果を見ると、マルをつけた数は、男女間では少し有意差があった。そして、学校分類間、学年間、アルバイト経験の有無で有意差があった。学年間では、学年が上がるにしたがってマルの個数が減る傾向がある。アルバイト経験では、アルバイト経験のない生徒の方が、ある生徒よりもマルの個数が多いという傾向が認められた。アルバイトを経験することで、「大人の世界」と接触する機会が増え、この質問を「生徒のまなざし」としてではなく「大人のまなざし」として回答しているのではないだろうか。大人に近づくほど、規範意識がゆるむとしても、法化主義とも呼ばれる現状もあり、最低限のことを守らなくては社会の秩序はおぼつかない。高校生活での「けじめ」が強く求められる。

5-3 マナーの問題

「マナーにもマナーを」をいう消費者金融のコマーシャルがある。しかし、お金を借りたら返すのが当たり前で、これはマナーの問題ではなく、ルールの問題であろう。マナーとはどうしても守らなくてはならない義務ではない。しかし、社会生活を送る上で大切なものである。私たちの社会生活は、ルールによって守られていると同時に、マナーによっても支えられてもいるからだ。また、マナーは人間の「品格」を感じさせてくれるものである。ベストセラーとなった坂東眞理子『親の品格』『女性の品格』はマナーを守ることによって品格へ結びつくというストーリーで描かれている。マナーに対して、現代の高校生はどのような意識を持っているのだろうか。「公共の場所での会話は周囲を気にするべきだ」「公共の場所での化粧はつつしむべきだ」など、9項目のマナー意識を取り上げ、「そう思う」「とてもそう思う」「ややそう思う」とする割合を示したのが表45である。

表45 マナー意識(「そう思う」の割合)

	全体	男	女	普通科Ⅰ	普通科Ⅱ	専門学科
1. 公共の場所での会話は周囲を気にするべきだ	88.5%	87.9%	89.1%	92.4%	89.6%	85.5%
2. 公共の場所での化粧はつつしむべきだ	72.0%	69.6%	74.0%	77.6%	70.4%	69.7%
3. 公共の場所で地べた座りはするべきではない	75.3%	70.1%	79.4%	81.3%	73.1%	73.3%
4. 電車の中でお年寄りに座席を譲るべきだ	93.1%	90.8%	95.0%	94.9%	94.1%	91.3%
5. 公共の場では携帯での話しはつつしむべきだ	83.2%	82.1%	84.1%	87.3%	83.8%	80.2%
6. 近所の人に会ったらあいさつするべきだ	89.9%	87.4%	91.9%	91.2%	92.5%	87.2%
7. 友達との待ち合わせの時間は守るべきだ	95.5%	94.5%	96.3%	95.9%	96.4%	94.6%
8. たとえ休日でも出かけるときは身だしなみを整えるべきだ	78.6%	77.9%	79.2%	80.7%	78.5%	77.6%
9. 目上の人への言葉づかいは気をつけるべきだ	95.3%	93.6%	96.8%	95.5%	95.4%	95.1%

この9つの項目の中で「そう思う」の割合がもっとも多いのは、「友だちとの待ち合わせの時間は守るべきだ」で95.5%、続いて「目上の人への言葉づかいは気をつけるべきだ」95.3%、「電車の中でお年寄りに座席を譲るべきだ」93.1%となっている。これらの結果から、高校生が「友人との関係」

「先輩との関係」を大切にしているということがわかる。「電車の中でお年寄りに座席を譲るべきだ」という項目に93.1%もの高校生が「そう思う」と答えており、極めて高いマナー意識、あるいは敬老の精神を持ち合わせているといえよう。9割には達していないものの、「近所の人に会ったらあいさつするべきだ」も89.9%が「そう思う」と答えており、実際にできているかどうかは別にして、弱者を大切にしようとする気持ちや、「あいさつ」の大切さについては理解が進んでいるように思われる。

また、「公共の場所での会話は周囲を気にするべきだ」に88.5%が、「公共の場では携帯での話しはつつしむべきだ」に83.2%が、「そう思う」と答えている。これらの行為は他者の迷惑になるものである。それに対して「公共の場所での化粧はつつしむべきだ」には72.0%、「公共の場所で地べた座りはするべきではない」には75.3%の生徒が、「そう思う」と答えている。この「公共の場での化粧」や「地べた座わり」という行為は、とくに誰かに対して迷惑をかけるわけではない。しかし、そうした光景に出くわすと、私たちは何か違和感を感じるはずである。それは化粧や地べた座りをすることによって自分がどのように思われているのかという点にはあまり頓着していないからであり、居合わせる側にとっては、「何か無視されているような感じ」(長谷川公一ほか『社会学』有斐閣、2007年、28頁)がするからであろう。いずれにしても、明らかに迷惑な行為というわけではないので、「そう思う」の割合はやや減少している。

5-4 友人関係

現代の高校生の友人関係についてはどのようになっているのだろうか。まず、普段よくつきあっている友人グループについて、その人数とどういう縁で繋がっているのかを調べた結果が、表46、表47、表48である。

表46 友人グループの数(学校内・外は問わない)

	全体	男	女	普通科Ⅰ	普通科Ⅱ	専門学科
1. ない	2.4%	4.1%	1.0%	1.2%	2.6%	3.0%
2. 1つ	6.8%	7.8%	6.1%	4.1%	7.0%	8.4%
3. 2つ	24.0%	26.6%	21.9%	23.3%	24.3%	24.1%
4. 3つ	30.2%	27.5%	32.5%	30.1%	30.8%	29.8%
5. 4つ	11.8%	9.0%	14.1%	13.3%	12.5%	10.3%
6. 5つ以上	24.8%	25.0%	24.5%	28.0%	22.8%	24.4%

表46は、ふだんよくつきあっている友人グループがいくつあるかを尋ねたものである。これを見ると、男女とも3つと答えた割合が一番多い。ただ、男子で「4つ」「5つ以上」と答えた生徒が、あわせて34.0%であるのに対して、女子は38.6%であった。また、2つ以下であると答えた生徒が、男子では38.5%であるのに対し女子は29.0%であった。これらのことから、一般的傾向としては、女子の方がより多くの友人グループを持つ傾向にあることがわかる。

表47 友人グループのメンバー数

	全体	男	女	普通科Ⅰ	普通科Ⅱ	専門学科
1. 2人	13.8%	6.3%	19.6%	12.1%	13.9%	14.7%
2. 3人	18.1%	17.7%	18.5%	17.9%	16.7%	19.5%
3. 4~6人	53.5%	57.5%	50.3%	53.3%	55.1%	52.4%
4. 7~9人	8.4%	9.9%	7.2%	10.0%	8.5%	7.2%
5. 10人以上	6.2%	8.5%	4.4%	6.7%	5.8%	6.3%

表47は、もっとも仲のよいグループのメンバーは、本人を含んで何人で構成されているのかを尋ねた結果である。男女とも「4~6人」と答えた生徒がもっとも多くて、全体では53.5%であった。

「2人」のグループの割合は、男女間でかなりの差があり、男子が6.3%に対し、女子は19.6%であった。男子は「2人」「3人」を合わせると男子が24.0%であるのに対し、女子は38.1%である。これらのことから、男子は比較的人数の多いグループを形成するのに対して、女子は比較的小さいグループを構成する傾向があるといえよう。

表48は、もっとも仲のよいグループが、どのような結びつき(縁)によって作られ、どのように構成され、どのように機能しているか、「あてはまる」「あてはまらない」の二者択一で選択してもらった結果である(表は「あてはまる」の割合)。70%以上の生徒が「あてはまる」と回答した項目をみると、「現在同じ学年の人が多く」(94.7%)、「同性の人のみである」(81.2%)、「現在同じ学校の人が多く」(73.4%)、「将来ずっと続くグループだと思う」(71.5%)、「何でも悩み事を相談しあえる」(71.1%)の5項目がある。しかし、「休日一緒に行動することが多い」とまではいかないようである。この項目に「あてはまる」と回答したのは39.1%であった。

表48 友人グループの特徴

	全体	男	女	普通科Ⅰ	普通科Ⅱ	専門学科
1. 現在同じクラスの人が多く	60.1%	59.3%	60.8%	56.0%	57.6%	64.8%
2. 現在同じ学年の人が多く	94.7%	93.5%	95.5%	96.9%	95.6%	92.5%
3. 現在同じ学校の人が多く	73.4%	72.6%	74.1%	75.1%	73.2%	72.5%
4. 現在同じ部の人が多く	44.3%	50.0%	39.9%	46.9%	43.8%	43.0%
5. 同じ中学出身の人が多く	49.5%	53.2%	46.7%	46.5%	49.5%	51.5%
6. 同性の人のみである	81.2%	77.7%	83.9%	86.1%	82.9%	76.7%
7. 同じくらいの成績の人が多く	25.2%	25.6%	25.0%	26.2%	24.3%	25.4%
8. メンバーはいつも決まっている	73.5%	69.5%	76.6%	71.0%	70.9%	77.1%
9. 休日一緒に行動することが多い	39.1%	42.6%	36.5%	37.1%	39.9%	39.8%
10. 何でも悩みごとを相談しあえる	71.1%	61.4%	78.5%	72.4%	69.7%	71.3%
11. 将来ずっと続くグループだと思う	71.5%	64.1%	77.3%	71.4%	72.0%	71.2%

男子は女子に比べ「同じ中学出身の人が多く」とする割合が大きい。女子は、「同性の人のみである」、「何でも悩みごとを相談しあえる」、「将来ずっと続くグループだと思う」と答える割合が男子に比べ大きい。しかしながら、「休日一緒に行動することが多い」の質問には男子42.6%が「はい」と答えているのに比べ、女子では36.5%である。ここでも男女間で、友だちとの距離の取り方や親密度といった点で違いが表れている。

ところで、こうした友人関係のなかで、友だちとどのような話をしているのだろうか。それについてまとめたのが表49である。

表49 友人との会話の内容

	全体	男	女	普通科Ⅰ	普通科Ⅱ	専門学科
1. 成績や勉強について	9.1%	11.9%	6.8%	14.0%	9.7%	5.6%
2. 部活動について	14.1%	19.9%	9.6%	15.3%	14.2%	13.3%
3. 将来の進路について	7.7%	7.5%	7.9%	7.7%	7.8%	7.6%
4. 他の友人について	7.6%	8.4%	6.9%	7.0%	7.4%	8.1%
5. 芸能界やタレントについて	12.1%	10.1%	13.7%	11.7%	11.6%	12.7%
6. おしゃれやファッションについて	5.8%	4.3%	7.0%	3.0%	6.4%	7.0%
7. 社会問題や政治・経済について	0.7%	1.2%	0.3%	0.9%	0.3%	0.8%
8. 異性について	12.9%	11.6%	13.9%	11.0%	12.4%	14.5%
9. 悩みごとについて	9.9%	4.3%	14.3%	8.6%	10.3%	10.4%
10. その日学校で起こったことについて	15.3%	14.6%	15.8%	17.0%	15.4%	14.1%
11. その他	4.9%	6.2%	3.8%	3.8%	4.4%	5.9%

ふだんの会話は、全体からすると、「その日学校で起こったことについて」(15.3%)、「部活動について」(14.1%)、「異性について」(12.9%)、「芸能界やタレントについて」(12.1%)が多い。この項目についても性差が見られ、女子は男子に比べ「悩みごとについて」を話題にする割合が大きい。男子は「部活動について」を一番にあげている。女子の方が男子に比べ、友人との距離の取り方が近いようである。

こうした友人関係のあり方を「広がり」と「深さ」についてまとめたのが表50である。

表50 友人関係の特性

	全体	男	女	普通科Ⅰ	普通科Ⅱ	専門学科
1. 多くの友人と広くつきあう	41.6%	50.4%	34.4%	46.5%	39.7%	40.1%
2. 少数の友人と深くつきあう	58.4%	49.6%	65.6%	53.5%	60.3%	59.9%

友人関係については、全体の41.6%が「多くの友人と広くつきあう」と答え、58.4%が「少数の友人と深くつきあう」と答えている。「少数の友人と深くつきあう」と答えた生徒がやや多い。なお、これらの友人関係の特性は、性や学校分類間で差が見られる。表50にみられるように、女子の方が「少数の友人と深くつきあう」と回答した割合が大きい。また、「普通科Ⅱ」、「専門学科」の生徒は、「普通科Ⅰ」の生徒に比べ「少数の友人と深くつきあう」と答える割合が大きくなっている。

V. おわりに

今回の調査結果をみると「学校生活は楽しい」に80.6%、「授業にまじめに参加する」に80.7%が、「あてはまる」と答えており学校生活についておおむね前向きに取り組んでいる。その反面、全体の33.9%が「学校をやめたいと思うことがある」と答えるなど、学校生活に対する評価の二面性が見られる。学業に対しては「少しでも成績を上げようになりたい」、「成績が気になる」に「あてはまる」と回答した割合はそれぞれ、53.1%、51.2%にとどまっており、高校生の学習活動を全体としてみると必ずしも積極的でないことがうかがえる。

授業以外の勉強時間「0時間」と答えた割合が、全体では32.7%であった。小学校、中学校では勉強時間が増加しているという報告がある中、高等学校では、少子化にともなう大学全入時代の到来やアルバイト活動への従事などの理由により、勉強離れが進んでいるのではないかと危惧される。小学校や中学校では「全国学力テスト」が実施されるようになり、香川県はかつてのような「学力テスト日本一」ではないが、それなりに上位に位置づいている。しかし、高等学校はどうだろうか。高校生が勉強しなくなったとされるのは、何も香川県だけではないが、学校以外での学習量がかなり減少しているのではないかと危惧される。

アルバイトは、高校生の放課後の生活に組み込まれてきている。部活動にとって代わってアルバイトが入ってきているといってもよいのかもしれない。それに伴って、高校生と社会人の境界があいまいになり、高校生としての既存の規範意識が揺らいでいる。アルバイトについては二つの考え方があり、一つは、アルバイトは社会体験として価値があるという考え方である。もう一つは、アルバイトに向かうために「パート・タイム生徒」になってしまい、彼らの生活に占める、学校の比率が小さくなることに対する懸念である。また、安易なアルバイト経験はフリーターに結びつくという考え方もある。アルバイトについての功罪は、今後よく検証していかなければならない。このアルバイトは、当然のことながら学校類型によって大いに異なっており、特に「専門学科」での問題のようにも思えるが、「普通科Ⅱ」でのアルバイト経験も決して少なくはない。もう一つ考えなければいけないのは、「教育と格差」の問題である。アルバイトをしている高校生のプロフィールをみると、親から小遣いをもらっていない生徒も少なくない。そのためにアルバイトをせ

ざるを得ないということになる。しかし、アルバイトをすれば学校の勉強からは遠ざかってしまう。結局のところ、学力格差に結びつくとともに、上級学校への進学にも影響する。進学だけ考えれば、アルバイトなどせず、学校の勉強に集中した方が有利である。

携帯電話の所持率は、全体では96.8%、男子95.3%、女子98.0%であった。携帯電話を持ち始める時期が早いほど、携帯電話を学校へ持ってきている割合が高く、「携帯電話を家に忘れると取りに帰りたくなる」と答える割合も高い。より携帯電話に依存しているといえよう。これでは学習に集中できないのではないか。小学校の時期から携帯電話を持つことに関しては、保護者とともに検討していかなくてはならない問題であろう。とはいえ、私たち大人にとっても携帯電話は便利な機械である。それを、子どもだからといって取り上げ、我慢させることなどできるはずもない。また、親にとっても、子どもが携帯電話を所持してしてくれることは、連絡も取りやすく、便利である。要は使い方の問題として、あるいはマナーの問題として、考えた方がいいのではないか。

「何でも話せる友人がいる」には83.6%が「あてはまる」と答えている。しかしながら、「友人から信頼されている」に、60.2%が「あてはまる」と回答するにとどまっている。自分では、何でも話せると思っていながらも、信頼されているかどうかについては自信がないということであろうか。

マナー意識をみると、「電車の中でお年寄りに座席を譲るべきだ」に93.1%、「近所の人に会ったらいざつするべきだ」に89.9%、「公共の場では携帯での話しはつつしむべきだ」に83.2%が、「そう思う」と答えている。おおむね良好であるといえよう。今の高校生は、今の若者は、と大人は言うが、評価すべき部分も多々あるように思われる。

今回の調査で、我々教師が思っている以上に、「オトナ」としての高校生の姿が浮き彫りになった。高校生と社会人のボーダーラインが溶解しつつあると言ってもよからう。そうした世界に高校生は生きているのである。

注

- 1) 「学校分類」とは「国公立大学合格率(ここでは、平成19年度の合格人数をその年の3年生在籍数で割ったものとした)」を利用し、普通科を二つに分け、国公立大学合格率が29.5%から41.5%の普通科4校(489名)を普通科Ⅰ、10%以下の普通科6校(614名)を普通科Ⅱとし、専門学科7校(823名)を加えた3群のことである。
- 2) 平均時間については、「30分以内」=30、「1時間ぐらい」=60、「1時間30分ぐらい」=90、「2時間ぐらい」=120、「2時間30分ぐらい」=150、「3時間ぐらい」=180、「それ以上」=210として算出した。
- 3) 平均時間については、「0時間」=0、「30分以内」=30、「30分から～1時間」=45、「1～1.5時間」=75、「1.5～2時間」=105、「2～3時間」=150、「3～4時間」=210、「4～5時間」=270、「5～6時間」=330、「6時間以上」=360として算出した。
- 4) この図では、「0時間」は「0時間」、「30分以内」と「30分から～1時間」をまとめて「1時間以内」、「1～1.5時間」と「1.5～2時間」をまとめて「1～2時間」、「2～3時間」は「2～3時間」、「3～4時間」と「4～5時間」、「5～6時間」、「6時間以上」をまとめて「3時間以上」と5つの段階に整理し、集計した。
- 5) 耳塚寛明(2001)は、長時間のアルバイトをこなすなど校外生活の比重が大きい生徒のことを「パート・タイム生徒」と呼んでいる。
- 6) 使用料金、平均額(円)は「5,000円ぐらい」=5000、「5,000円～10,000円」=7500、「10,000円～15,000円」=12500、「15,000円～20,000円」=17500、「20,000円以上」=20000として平均金額を算出した。
- 7) 平均の選択個数とは、全13項目の中でマルがついた数の平均を算出したものである。

[謝辞]

今回の調査にあたっては香川県下の多くの高等学校に御協力をいただきました。調査に御協力い

ただいた香川県教育委員会高校教育課、各高等学校の校長先生、教頭先生、担任の先生、そして貴重な時間を割いて回答いただいた生徒の皆様に厚く御礼申し上げます。